

でば 出庭遺跡発掘調査現地説明会資料

令和4年(2022年)8月28日(日) / 公益財団法人滋賀県文化財保護協会



遺跡と調査の概要

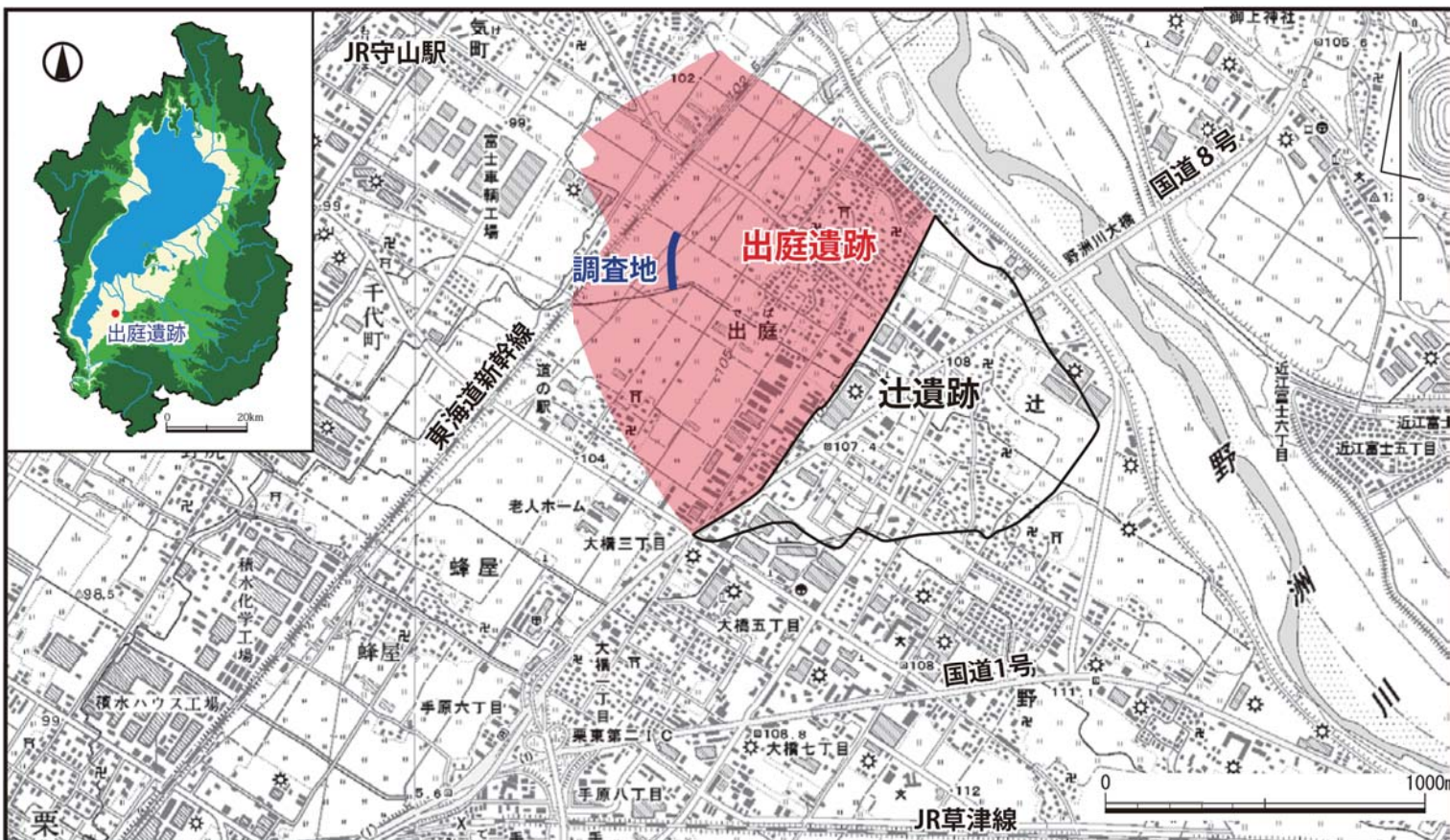
遺跡の概要 出庭遺跡*は、栗東市出庭・辻を中心に広がる古墳時代の大集落跡として知られています。これまでの調査では、玉作りなどの手工業工房跡をはじめとして、多数の遺構がみつかっています。5年間にわたる調査を通じて、古墳時代前期から中期前半(約1,700~1,600年前)の鍛冶工房群があったことが明らかとなりました。

調査の概要 公益財団法人滋賀県文化財保護協会では、滋賀県文化スポーツ部文化財保護課からの依頼を受け、国土交通省近畿地方整備局滋賀国道事務所が計画している一般国道8号野洲栗東バイパス建設に伴う発掘調査を平成30年度から実施しており、現在も調査継続中です。

令和2・3年度調査では、古墳時代前期(約1,700年前)の竪穴建物が20棟以上見つかりました。このうち9棟の竪穴建物からは、鍛冶関係の炉跡を検出し、それらに伴って鉄製品や砥石等の鍛冶関係遺物が出土しました。これらのことから、小型の鉄製道具の製作や農具等の修理を行う鍛冶工房が存在していたことが明らかとなりました。また、5世紀前半頃には、渡来系の技術を用いた鍛冶やガラス小玉の製作等を行う工房が存在したことが、令和元年度の調査を通じてわかっています。

今年度の調査においては、令和3年度にみつかった鍛冶工房群の続きを確認し、広範囲に古墳時代前期の鍛冶工房群が広がっていたことを明らかにすることができました。

*令和3年度に辻遺跡の範囲変更が行われ、出庭遺跡が新設されました。



出庭遺跡の範囲と今回の調査地点の位置(青塗)

今年度の調査状況

今年度の調査では、5棟の古墳時代前期の竪穴建物を検出しました。そのうち4棟は強く被熱した炉跡を有し、床面で金属反応が確認されました。このことから、これらの竪穴建物では過年度調査でみつかった竪穴建物と同じく鍛冶をおこなっていたと思われます。鍛冶工房は互いに重複することなく建てられ、利用されていたようです。建物内部からは、煮炊き具と考えられる土器だけでなく、鍛冶作業に使われた敲石や砥石、そして勾玉などが出土しました。



慎重に土器を掘り出しています。

土器

調査の様子



竪穴建物 24



竪穴建物 22



竪穴建物内から出土した土器



竪穴建物 21 から出土した敲石



竪穴建物 21



出土した勾玉

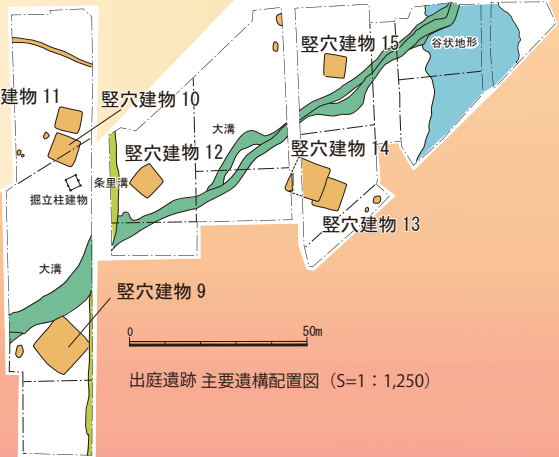


竪穴建物 20

強い熱を受けた炉跡



4基の炉跡



出庭遺跡 主要遺構配置図 (S=1:1,250)

2021 年度の調査でみつかった鍛冶工房



竪穴建物 18 (3.3m×3.2mの規模)



竪穴建物 10・11 (5.6m×5.2mの規模)



竪穴建物 9 (10m×10mの規模)

調査を通じてわかったこと

これまでの調査を通じて、みつかった古墳時代前期の竪穴建物の床面積は最大で 100 m²、最小で 9.24 m²と大小様々なのがみられます。また炉の構造や土坑の配置には複数のパターンがありそうです。

古墳時代中期になると、辻遺跡と出庭遺跡でみつかった鍛冶工房の建物規模や屋内遺構は、画一的になります。

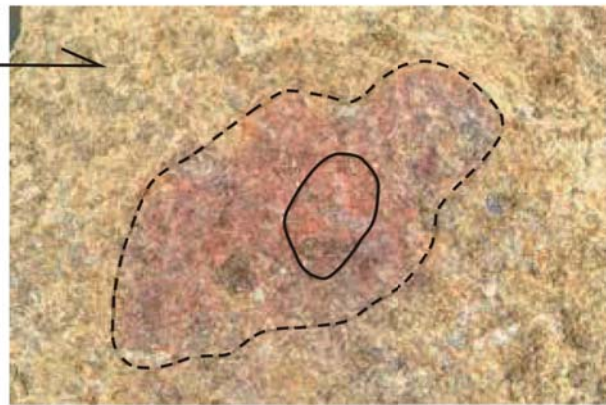
中期の画一的な鍛冶工房と比べて、前期に建物規模や屋内遺構にバリエーションがあることから、前期は鍛冶の方法や工程等を含めて試行錯誤していた段階にあったことが分かります。



鍛冶の様子 (想像図)

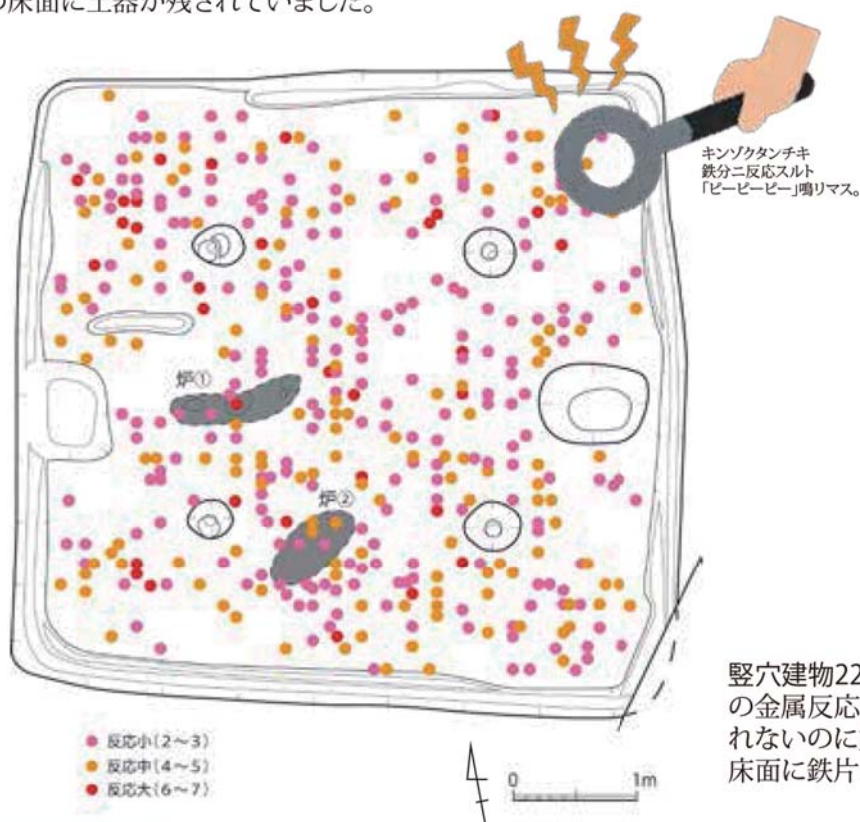
- 令和 4 年 (2022 年) 度発掘調査区
- 令和 3 年 (2021 年) 度発掘調査区
- 古墳時代前期の遺構
- 平安時代 (9 ~ 10 世紀) の遺構
- 室町時代の遺構

鍛冶の証拠を集める調査



竪穴建物22内の炉② 赤色に焼けて変色している範囲が鍛冶炉です。高温を伴う鍛冶作業が想定され、中央(実線)が強く被熱しており、硬化しています。その周辺(破線)には同心円状に被熱する範囲が広がっています。この他に建物22からは浅く掘り窪められた炉①も見つかっています。

竪穴建物22 建物跡は方形で、5.4m×5.1mの規模です。4本の柱跡と2基の対になる土坑、中央付近に炉が2か所設けられていました。北隅には、当時の床面に土器が残されていました。



竪穴建物22でみつかった鉄片 建物内に堆積した土を丁寧に水洗選別したところ、微細な鉄片が複数点出土しました。鉄片の大きさは1~2mm以下と微細であり、薄く扁平な構造をして、鈍い光沢が見られます。

竪穴建物22床面の金属反応探査 金属探知機を用いて、建物床面の金属反応の探査をしました。その結果、建物の外では反応がみられないのに対し、建物内部の床面全体には反応がありました。建物床面に鉄片が飛び散るような作業をしていたと想定されます。

まとめ

竪穴建物が鍛冶に関連すると考える証拠を以下にまとめます。

- ①鍛冶炉: 建物中央付近に通常よりも強く被熱した炉が存在し、複数基設けられる場合もある。
- ②金属反応: 建物内部の床面から金属反応を確認できた。
- ③出土遺物: 古墳時代前期の土器のほかに、敲石や砥石等の鍛冶具、微細な鉄片が出土している。

①~③の証拠に基づき、本調査で見つかった竪穴建物は鍛冶工房であることが明らかになりました。これまでの調査において、南北550mの範囲に確認された16棟の古墳時代前期の竪穴建物のうち、13棟に鍛冶炉があり、鍛冶工房と考えられます。これまでの調査を通じて、出庭遺跡では広範囲に古墳時代前期の鍛冶工房群が広がっていたことがわかりました。

一般国道8号野洲栗東バイパス建設に伴う発掘調査は今年度で最後となりますが、今後継続される整理調査を通じて、さらなる調査成果を発見し、遺跡の魅力を報告していきたいと考えております。引き続きご協力のほどをお願いします。